

明海大学 不動産学部

不動産の不思議

第93回

学生たちの視点と発見

【学生の目】

住宅街を歩いていると、最近建てられた戸建て住宅は軒(のき)の出が少なく、庇(ひさし)を付けない住宅が多いと感じる。古い戸建て住宅は軒の出が大きく、窓ごとに庇を付けるのが基本だ。

日射をコントロールする住宅

塗り壁)や紙(障子)でできた外壁や外部開口部を雨から守るには大きな軒や庇が有効だ。高温多湿の気候を快適にするために通風が必要となる。開口部をなるべく大きく、なるべく多く確保するが、吹き込みを防止できる軒や庇は雨天の通風にも有効だ。

私が特に重要と感じるのが日除け機能である。夏の強い直射日光は部屋の温度を上昇させるだけでなく、

に空気やアルゴンガスを密封する複層ガラスは断熱効果を高め、結露防止や遮音効果もある。その複層ガラス内側に金属膜を設けるのがLow E複層ガラスだ。金属膜が太陽光の放射による熱伝達を遮り、断熱性能がさらに高く、冷暖房費が節約でき、西日対策や紫外線による色あせ防止にも効果がある。日本では85年に初めて発売されたが、採用が義務付けられていないこともあり認知度も普及率もまだ高いとはいえない。多雨で高温多湿な気候と共存を図る伝統的な南方系の住宅に対し、ツ

日本の風土と共生する仕組みを

軒や庇の役割には、水濡れ防止、吹き込み防止、日除け機能、防汚機能などがある。伝統的住宅で軒や庇が大きいのは、緯度が低く、高温多湿で雨が多い風土に加え、建築材料に雨や汚れに弱い木や土や紙を用いる背景がある。水に弱い木や土(土

長時間の日射は壁の耐久性も損ねる。庇の有無で建物の耐久性が変化するのだ。一方で、太陽高度が低い冬の日射は庇で遮られることなく、奥まで差し込んで部屋を温かくできる。

太陽が直射する窓の遮熱や断熱のために、窓ガラスをLow E複層ガラスにする方法が注目されている。複数枚の板ガラスを重ねた隙間

技術革新を取り入れて省エネすることは大切だが、目新しさだけを強

調する住宅は中古市場での寿命は短い。日本の風土と共生する仕組みである軒や庇を見直す、技術革新と共存しながら日射をコントロールすることが大切だ。

「バイフォー」工法は北方系の住宅だ。寒冷地で暖かく過ごすために断熱性が大切で、断熱性が劣る開口部を小さくすることが基本だ(大田茉莉奈「不動産の不思議第83回」15年5月12日)。写真の住宅は後者に属し、Low E複層ガラスを使って

【教員のコメント】
軒や庇は和風住宅の生命線だ。繊細な木組みの美観と軒裏がもたらす陰陽のコントラストが味わいだが、防火や費用の面で切り捨てられている。今日的な合理性のために昔日の合理性が排斥される格好だが、次なる合理性も見据えたい。



軒の出が少なく庇を付けない家が増えてきた



森田 愛理
不動産学部4年